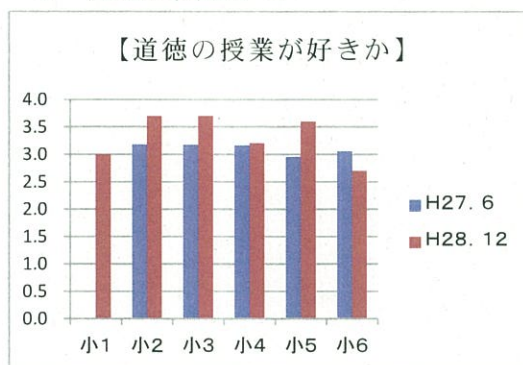


Ⅲ 研究の成果と課題

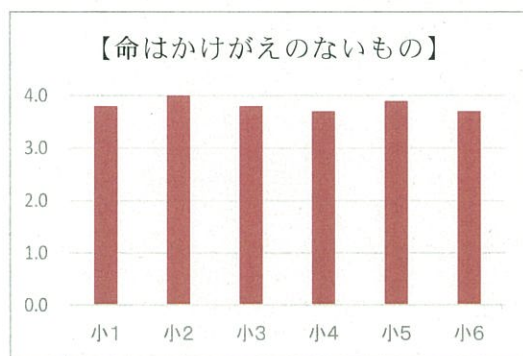
1 児童の実態から



【資料 3 9】

【資料 3 9 について】

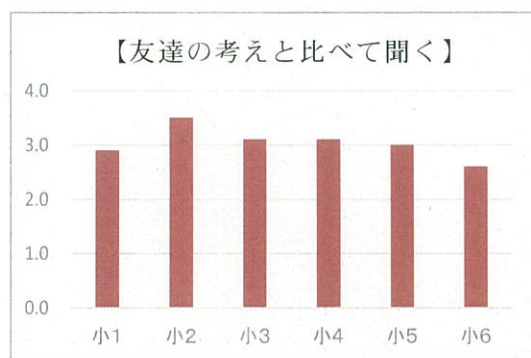
○「道徳の学習がすき」と答えた児童が、ほとんどの学年で増えている。体験とつなぐことで、他人事ではなく、自分のこととして授業に参加する児童が増えたと考えられる。単に登場人物の心情を場面ごとに繰り返し問うことが多かった今までの授業スタイルを変え、「みふねっこの学習過程」に沿った授業展開の工夫があったからだ考える。



【資料 4 0】

【資料 4 0 について】

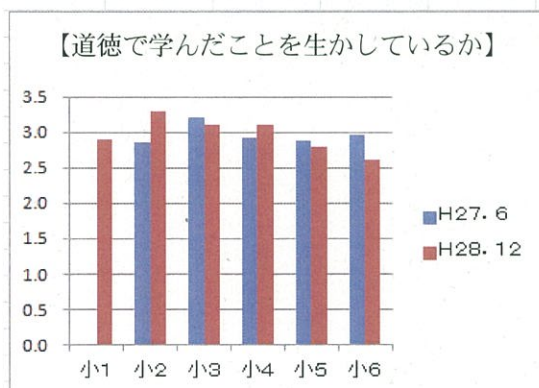
○本アンケートで本校児童の全員が「4：とても思う」「3：思う」と答えていた。特に2年生の値が高いのは「家族の死」を体験した児童を通し、学年全体で「命」について見つめる機会が多かったためと思われる。体験活動が児童の心を動かし、道徳的価値の大切さを実感できることがアンケート結果から表れている。



【資料 4 1】

【資料 4 1 について】

○本アンケートは「友達の考えと比べて聞いて、はっとしたり、考えが深まったりしたか」と聞いたアンケートの結果である。テーマである「自分をつなぐ」という点で課題が見られる。自分の意見は持っていますが、友達との意見をよく聞き、より考えを深めようという意識が低い。今後、授業展開の工夫がより必要である。

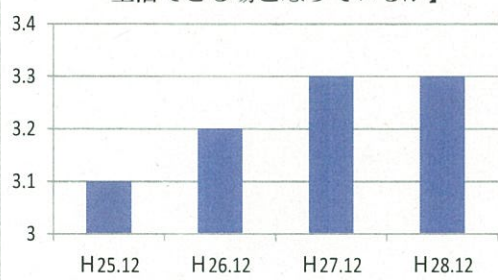


【資料 4 2】

【資料 4 2 について】

○H 2 7 年と比較しすると、道徳で学んだことを生かしている」と答えた児童があまり増えていない。実際の生活場面でよりよい行動をしようと行動する児童の姿は、いろいろな面で見られるか、道徳の授業での学びを生かしているという意識は、やや低い。道徳の授業の学びと行動をつなぐ手立てが必要である。

【学校は子どもたちが楽しく生き生きと生活できる場となっているか】



【資料 4 3】

【資料 4 3 について】

- 「学校は児童が楽しく生き生きと生活できる場になっている」について、道徳教育の研究を始めた H 2 5 年度から H 2 8 年度にかけ、保護者による評価が高まっている。道徳の授業参観や、学校通信・道徳通信等を通して全校を挙げた道徳教育の取組が保護者に理解されたと捉えられる。

2 研究の仮説から

【仮説 1 について】

- 各教科等や体験活動と道徳をつなぐ工夫として、道徳教育年間計画別葉の活用を全職員が意識したことで、児童の思考に沿った道徳教育を進めることができた。道徳教育全体計画別葉を作成して終わりではなく、校内研修の時間を使って、見直しをしたり、つながりを学年間で話し合いながらチェックを入れたりする作業は、職員の意識を高める上でも効果的だった。
- 各教科等や体験活動と道徳をつなぐことで、児童が授業の中で登場人物と自分を重ねて考えることができた。年間を通じて、積み重ねるように道徳的価値を学ぶことができたことは、児童の成長に繋がった。
- 各学級の道徳の授業にとどまらず、学級活動で心を耕す取組が行われたり、行事等で「感謝」の気持ちを発信したりする姿が見られた。

【仮説 2 について】

- 体験活動を道徳の授業につなぐ工夫として「みふねっこの学習過程」を作成し、道徳の授業を進める際に活用した。学習過程の中でどう問題意識を持たせるか、どう体験活動を振り返らせるか等、道徳の授業の改善が見られた。
- 「みとおす過程」では、アンケートや体験活動の写真等を活用することで、児童が問題意識を持って授業に参加していた。また中心発問では、題材のテーマを問うような発問や、自分ならどうするか等の多面的な発問をしたことで、児童が自分のこととして、真剣に考える姿が見られた。「ねりあげる過程」では、児童の共通体験を道徳の授業で生かしたため、互いの思いを理解し合えた。

▲体験を授業に取り入れる実践があまりできなかった。特に低学年では、動作化や役割演技等の擬似体験を授業に生かしていきたい。

【仮説 3 について】

- 評価の時や場を「みとおす過程」の中心発問・「ねりあげる過程」の自分を見つめる時間に設定した。特に、自分を見つめさせる際「道徳ノート」を活用したことで、児童の考えを残すことができた。
- 交換授業は、授業しながらでは難しい児童一人一人の評価に役立った。学年で教材研究ができ、授業力の向上にもつながった。

▲授業で道徳的価値について学んでおり、大事なことに気づいてはいるが、学んだことと行動が伴わない状況が見られた。

▲道徳ノートは各担任が自由に活用している状態であり、今後、学年に応じた活用方法を考えていきたい。

▲評価カードについては、まだまだ改善の余地が大いにある。校内で論議し、今後より使いやすいものにしていきたい。

お わ り に

本校では、平成25年度より、道德教育をテーマに校内研修を進め、その年の課題になったことを次年度に解決するための取組を重ねてきました。昨年度は、研究主題を「豊かな心をはぐくみ、主体的に実践する児童の育成を目指して～道德の時間と特別活動の有機的な関連の工夫～」とし、校内研修を進めました。道德の授業で「心を耕し」そして、特別活動と有機的にリンクさせ「行動化へ繋ぐ」取組を展開することを目指してきました。研究を進める中で、児童は、道德の時間で道德的価値を自覚し、自己の生き方について考えを深めてきました。さらに学級活動の中における計画・話し合い活動、実践活動、振り返り活動において行動として道德性が養われていることを感じるようになってきました。しかし、昨年度の反省としては、道德の授業では、資料から離れ「自分から振り返る過程」になると、うまく自分を見つめたり振り返ったりすることが苦手な児童が多いという課題が残りました。

平成28年度は、研究主題を「いのち輝き、自他を『つなぐ』道德教育を目指して～体験活動を道德の授業に生かす取組～」とし、研究に取り組んできました。特に各教科等や体験活動を道德につなぐ工夫と体験活動を道德の授業につなぐ工夫について実践と研究を重ねてきました。このことにより、児童の行動にも変化が見られるようになってきました。具体的には、毎朝の4年生や5年生の有志による清掃ボランティア活動や児童会の企画委員と一緒に取り組むあいさつ運動などに主体的に関わる姿として現れてきました。

今後も、次世代を担う児童自らが、学ぶ意志や意欲をもち、未来の夢や目標を見据え、自分の利益だけでなく社会や公共のために何をするかを考えられる児童の育成を目指して、全職員で研修を進めていきたいと思えます。

最後に、本校の研究推進にあたって、貴重な指導・助言を頂いた上益城教育事務所の先生方をはじめ、管内の諸先生方に心より感謝いたします。

【研究同人】

大脇為久	梅野 力	古瀬英仁郎	坂口浩子	古江哲哉	市原清美
谷口和之	赤星桂子	緒方三津子	松出直子	河口みさ	井上光代
吉村広伸	宮本真宏	村上未佳	中山圭美	豊住和幸	廣田拓也
河島加奈	河原邦博	内村加奈子	櫛山 忍	本田繭巳	中川恭文
山本達朗	林田雅也	雑山友希	下山千晴	宮崎由美子	杉浦真弓
河部裕美	岩上美和	村本恵子	寺野由香	井藤はづき	吉澤益子
坂本香代子					

【主な参考文献】

- ※小学校学習指導要領解説 特別の教科 道德編 H27年3月 文部科学省
- ※小学校学習指導要領解説 道德編 H20年6月 文部科学省
- ※道德教育 2015 NO687 明治図書
- ※道德教育 2015 NO688 明治図書
- ※道德教育 2016 NO701 明治図書